ニューガラス関連学会から

ICG 年会報告記
(Report of the Annual ICG Meeting)

旭硝子㈱中央研究所
伊藤　節郎

1997年6月9～12日まで"Fundamentals of Glass Science and Technology"のテーマの下でThe Annual ICG (International Commission on Glass) Meetingが，The 4th ESG (European Society of Glass) ConferenceおよびThe 47th Annual Meeting of the Scandinavian Society of Glass Technologyと合同でスウェーデンのVäxjöで開催され，同時にICGの各委員会の運営会議が開催された。筆者は，今回，ICGの委員に任命され，これらに参加する機会を得たので会議の概要とICGの活動について報告する。

Växjöはストックホルムあるいはコペンハーゲン経由で日本から約14時間，樺太の北端とほぼ同緯度の森と湖に囲まれた北の地である。夏は白夜に近く，夜11時頃まで明るく3時頃には夜が明ける。ガイドブックによれば6月でも気温は18度前後の涼しさであるということで，セーターなどを持ち込んだが，会議期間中は好天に恵まれ，Tシャツで十分，汗ばむほどの暑さであった。この地の周辺は昔から，ガラスの王国と呼ばれ，工芸ガラスの製作がきわめて盛んである。

今回の合同国際会議には，約300名の参加があった。参加者はスウェーデン，ドイツ，フランス，アメリカ，オランダ，チェコの順に多く，そのほかヨーロッパの国からの参加者が多かった。ちなみに日本からの出席者は9人であった。

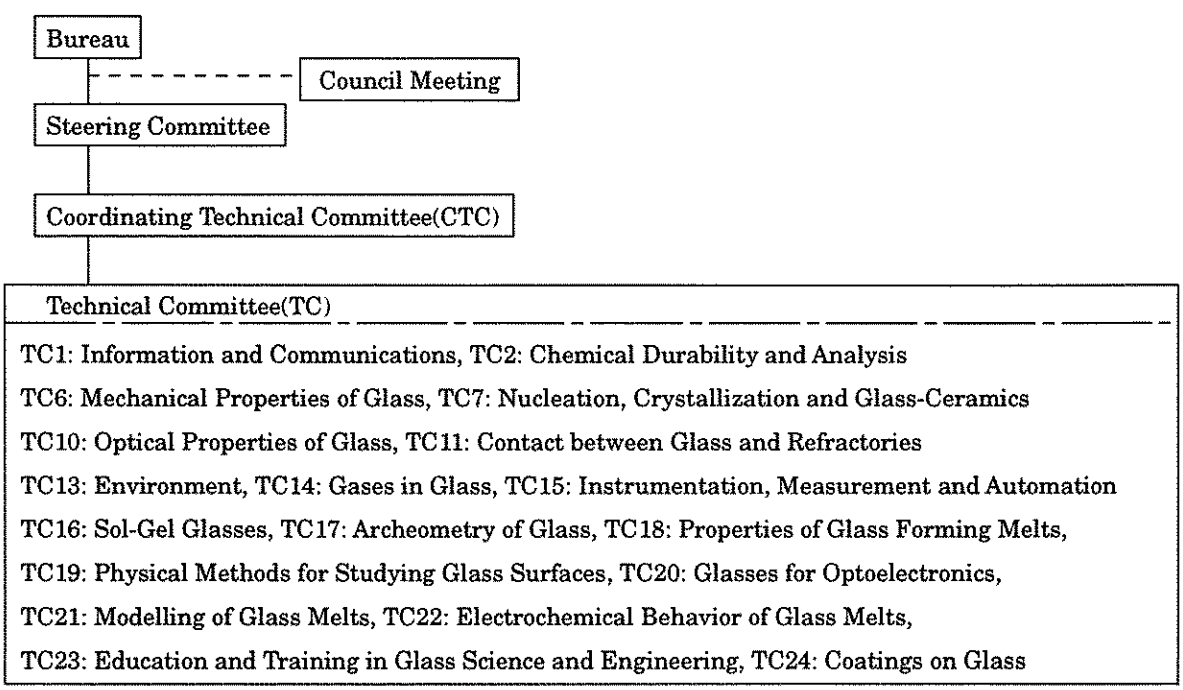
会議はScientificとTechnicalに分けられ，3つのセッションが同時進行で行われた。Scientific分野では，ガラス構造，表面・コーティング，化学的性質，電気・光学的性質，結晶化等について，また，Technical分野では，ガラス溶解，窯の設計と操作，品質と評価，成形等について発表があった。会議全体の感じとして，技術部門の人の出席が多く，Technical分野の発表の方がより活況を呈していたように思われる。特に，泡の生成，酸化還元，酸素燃焼，シミュレーション，リサイクル，NiSによる破壊，平坦性など，現場で問題となっていることに関する研究発表が多く，製造に携わる人にとっては特に有益であったであろうと思われる。しかし，発表の中には科学的解析が十分なされていないものもあり，今後ICG年会を発展させ，さらに有意義なものにしていくためにはより多くのガラスの研究者の参加が必要であることを感じた。また，会期中の半日を使って，ポスターセッションが開かれた。ここでは，特に，NGFからガラスデータベース"Interglad"の紹介に参加した西岡氏のブースが最も人気を博していた。

ICGの組織や活動については，正直言って，筆者もこれまでほとんど知らなかったし，多くの読者の方々もご存じ無いと思いこの紙面を借りて簡単に紹介したい。ICGは1933年に設立

〒221　横浜市神奈川区羽沢町1150
TEL 045-374-8807
FAX 045-374-8867
E-mail : sito@agc.co.jp

され，現在世界27ヶ国が加盟し，ガラスの科学，技術及び産業の発展を推進している団体である。日本では，日本セラミックス協会が分担金を負担し，窓口となっている。ICGの組織は図に示すとおりである。Bureauは会長を含め4人からなる。今年6月までの3年間，京都大学曽我教授が日本人で初めて会長を勤められた。現在，米国Alfred大Pye教授が会長である。Council Meetingは各国1～3名の代表からなり，Bureau, Steering CommitteeおよびCo-ordinating Technical Committee（CTC）の人事の任命，予算執行，事業に関する議決を行う。現在，旭硝子・田嶋氏およびセラ協ガラス部会長がそのメンバーである。Steering CommitteeはICG全体の運営および予算の企画立案を行う実務の最高機関である現在，曽我教授がメンバーである。CTCはTechnical Committee（TC）を統括し，各TCへの助言や活動の支援を行う。筆者は6人のCTC委員の一人である。TCにはTC1～24まであるが，すでに目的を達成して終了したTCもあり，現在18のTCが活動している。各TCは毎年2～3回運営会議あるいはシンポジュウムなどを開催し，ガラスの特性，製造技術や製造上の問題点，評価技術，標準化，ラウンドロビンテスト，広報などについて活発に活動しガラス産業の発展に貢献している。現在，TC20およびTC24のChairmanは，職能大・西沢紘一氏，元旭硝子・鈴木巧一氏がそれぞれ勤め，各TCには1～数名の日本人のメンバーが登録されている。しかし，各TCの会議が主としてヨーロッパで開催されるため日本人メンバーの参加が少ないので，今後代理出席を含めて特に若い方々の積極的な参加をお願いしたい。

今回も上記ICG年会中あるいはその前後に各TCの会議が開かれた。その内，TC7では日本電気硝子・和田氏を含めて3件の講演が，また，TC14では"Water in Glass"のテーマで討論会が，いずれも一般公開の形式で行われていた。筆者はTC14の討論会に出席する機会を得たが，ここでは環境上の問題からヨーロッパで急速に普及しつつある酸素燃焼につい



て，技術的な問題点，特に燃焼時に発生する水による煉瓦の浸食，ガラス融液中への水の拡散，それにともなう溶解・成形条件の変化，ガラス中の水による物性の変化，水の分析法などについて活発な議論が行われていた。その他は非公開ではあるがそれぞれの分野で問題となっている技術について真剣な討論が続けられていたようである。

会議の終了とともに，予定を変更して急ぎ帰国したのでスウェーデンの文化に十分接することができなかったのが心残りである。またいつか訪れてみたいと思う。